

1. 目的

沖縄において世界最高水準の教育研究の推進を図り、もって①沖縄の振興と自立的発展、②世界の科学技術の発展に寄与することを目的とする(沖縄科学技術大学院大学学園法(平成21年法律第76号))。

2. 特色

大学院大学の設置主体として学校法人「沖縄科学技術大学院大学学園」を設立。
沖縄振興の観点から国が財政支援を行う(学園法)。

- ・学部の壁のない組織(単一の研究科・専攻)
- ・5年一貫制の博士課程のみ
- ・教育研究は英語で行い、学生・教員の半数以上は外国人。



(期待される沖縄振興への効果)

- ・科学技術の国際的な拠点の形成
- ・イノベーション・エコシステムの形成
- ・科学技術に関する人材の育成 等

3. 取組状況

※肩書、人数はOISTのHPより

○平成23年11月に学校法人を設立(大学院大学は平成24年9月に開学)。

(学園の理事等)

理事長・学長：カリン・マルキデス(元スウェーデン・チャルマース工科大学学長)

非常勤理事(14名)：ノーベル賞受賞者等の科学者、沖縄振興や大学経営に係る有識者等



カリン・マルキデス
理事長・学長



キャンパス外観

○教員93名(22の国・地域、外国人63%)を含め、計638名(うち外国人67%)が研究に従事。
(物理学、化学、神経科学、海洋科学(海洋気候変動含む)、環境・生態学、数学・計算科学、分子・細胞・発生生物学、工学・応用科学の8分野を基礎とする先端的・学際的な研究)(R7.1時点)

○学生295名(53の国・地域、外国人80%)で、累積で174名が卒業 (R7.1時点)。

○教員の評価は、採用時及び原則5年ごとに、外部の評価委員会により世界的に高いレベルの基準で実施。

○平成22年3月に第1研究棟、平成24年6月に第2研究棟、平成27年6月に第3研究棟、令和2年4月に第4研究棟、令和5年4月に第5研究棟を供用開始。

OISTメインキャンパス



OISTの沿革



2001年6月

尾身幸次内閣府特命担当大臣
(沖縄・北方対策、科学技術政策
担当；当時)が、国際的な大学院
大学を沖縄に新設する構想を提唱

2007年3月

キャンパス造成を開始

2009年7月

「沖縄科学
技術大学院
大学学園法」
成立

2011年11月

初代学長にジョナサン・
ドーファン博士就任



2015年3月

第3研究棟
供用開始

2011年11月1日

大学として認可

2003年4月

建設予定地として
恩納村を選定

2005年3月

「独立行政法人沖縄科学技術
研究基盤整備機構法」成立

2010年3月

恩納村にて
第1研究棟
供用開始

2012年6月

第2研究棟供用開始

2016年

エンジニアリング
サポートビル開設

2012年9月1日

第1期大学院生入学



← **2005年8月**
機構の理事長に

シドニー・ブレナー博士就任

OISTの沿革



2017年1月
第2代学長に
ピーター・グルース博士
就任

2021年
内閣府がOISTの
開学10 経過後見直しを完了

2022年5月
設立10 周年 記念行事



2023年6月
第3代学長に
カリン・マルキデス博士
就任

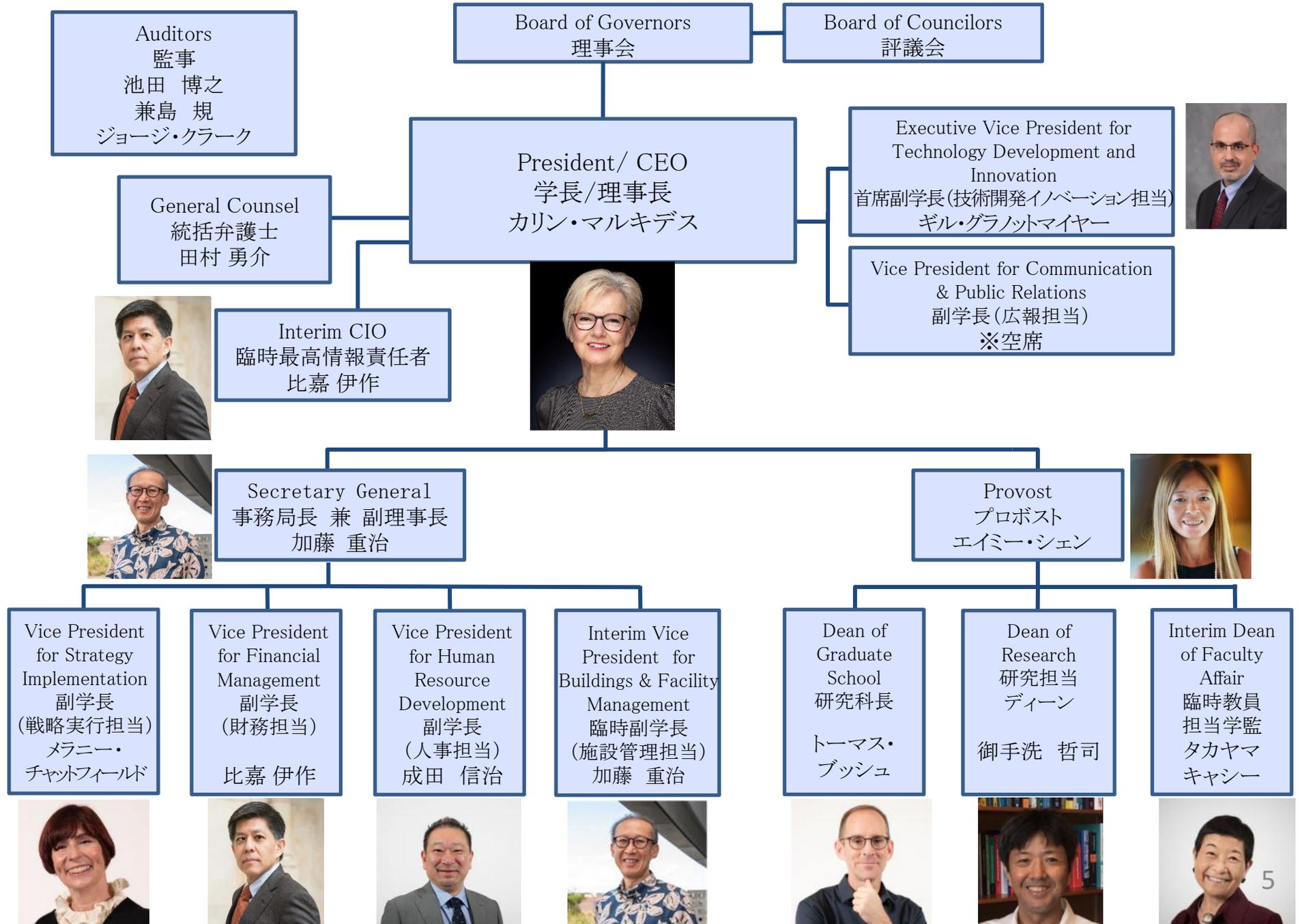
2018年
第1期博士課程が修了

2020年12月
第4研究棟供用開始

2023年4月
第5研究棟供用開始

2018年12月
大学研究から生まれたベンチャー育成のための
イノベーション・スクエア・インキュベーター
(I²) 創設

2022年10月
スバンテ・ペーボ教授が
ノーベル生理学・医学賞受賞



OISTの成果

■重要な科学論文割合ランキング：世界第9位・国内トップ^o(ネイチャー・インデックス2019)

| | |
|----|----------------------------|
| 1 | コールドスプリングハーバー研究所(米) |
| 2 | ワイスマン研究所(イスラエル) |
| 3 | オーストリア科学技術研究所(IST)(オーストリア) |
| 4 | 米国高等研究所(米) |
| 5 | ブランダイス大学(米) |
| 6 | ロックフェラー大学(米) |
| 7 | ジャヤハルワルネルー先端科学研究センター(印) |
| 8 | スイス連邦工科大学ローザンヌ校(スイス) |
| 9 | 沖縄科学技術大学院大学(日) |
| 10 | プリンストン大学(米) |

| | |
|----|----------------------------|
| 11 | スタンフォード大学(米) |
| 12 | マサチューセッツ工科大学(MIT)(米) |
| 13 | スイス連邦工科大学チューリッヒ校(スイス) |
| 14 | ノースウェスタン大学(米) |
| 15 | テキサス大学サウスウェスタンメディカルセンター(米) |
| 16 | カリフォルニア大学サンタバーバラ校(米) |
| 17 | カリフォルニア工科大学(米) |
| 18 | キングアブドラ科学技術大学(サウジアラビア) |
| 19 | ハーバード大学(米) |
| 20 | テクニオン・イスラエル工科大学(イスラエル) |

※40位東京大学、60位京都大学

■ペーボ教授：2022年ノーベル生理学・医学賞受賞(絶滅したヒト科のゲノムと人類の進化に関する発見)

スバンテ・ペーボ博士 (Dr. Svante Pääbo)

2020年5月～OIST教授(アジャクト)
研究ユニット「ヒト進化ゲノミクス ユニット」

独：マックス・プランク進化人類学研究所所長
2020年日本国際賞など受賞多数



■スタートアップ創出支援:短期間で高い成果

○大学発スタートアップ創出数：[52社](#) (令和7年2月現在)

○「…是非、OISTの素晴らしい成果をスタートアップや企業を通じて社会にしっかり還元してもらおう、そのことが沖縄や日本を大きく元気にしていくことにつながるのではないかと。こういった面でのOISTの未来について、期待をしたい。」

(令和4年5月15日:岸田総理出席「教育研究と産学連携に関する車座懇談会」)



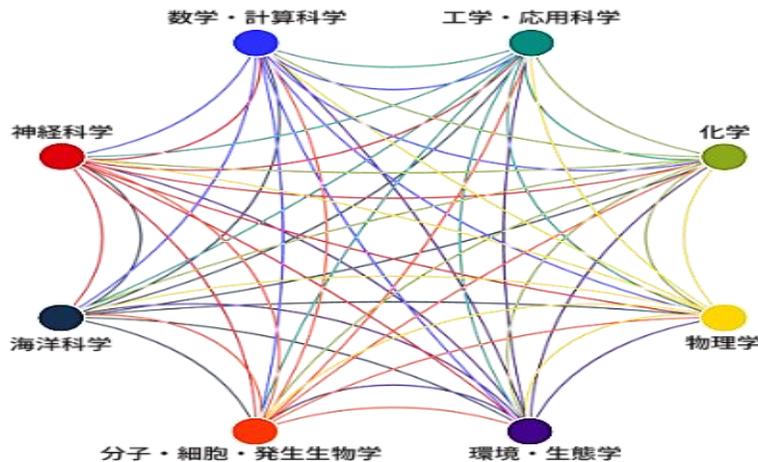
出典:いずれもOIST HP

OISTの成果を支える仕組み①

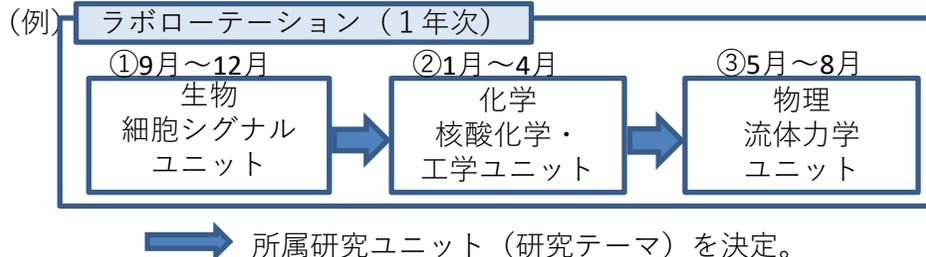
- 学際性：人類が直面している課題に対し、分野の境界を超えた新たな解決策を提示
- 国際性：世界中から優れた頭脳を結集

学際的研究

- 単一の研究科・専攻のみを置き、学問分野の境界にとらわれることのない学際的なプログラムを展開。
→物理学、化学、神経科学、海洋科学、環境・生態学、数学・計算科学、分子・細胞・発生生物学、工学・応用科学の8つの分野を基礎として、分野の壁を越えた学際的研究が行われている。

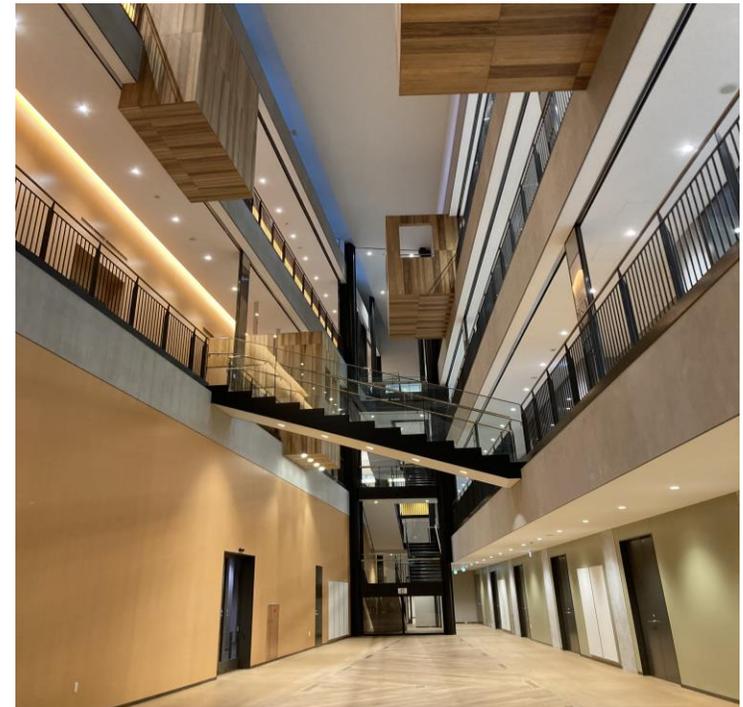


ラボローテーション



研究施設

- 同じ研究棟に、異なる複数の分野の研究室を配置。
- ラボスペースは、間仕切りの少ない開放的なオープンラボ形式。
- オープンラボ近くにラボサポートを配置し、研究機器の効率的な共用と研究者間の学際的交流を促進。
※共有研究機器の割合：65.5%
(金額ベース・R5年2月時点)



OISTの成果を支える仕組み②

英語環境

- 公用語は英語(教育研究のみならず、事務手続きも含め全てが英語)。
※事務処理も含め英語を公用語としている点は国内唯一。
- O I S Tに「国際業務部署」は設けられていない。
- 職員は原則ビジネスレベルの英語力を前提に採用。

国際公募

- グローバルスタンダードである9月～の学年歴を採用。
- 国際公募を積極的に実施。
→ 学術誌「Nature」や「Science」等における公募
役員・教員のネットワークを駆使して採用するケースも多い。

学生支援

- 研究補助の対価を得るリサーチ・アシスタント(RA)報酬制度を設け、授業料の負担を補完する経済支援システム等を導入。

優れた研究機材



ゲノムシーケンサー
遺伝子配列を解読する機器



次世代高性能計算機
(HPC: ハイパフォーマンス・コンピューティングシステム)
研究機器のサーバーを担う機器

研究支援

- 通常の大学・研究機関等では研究プロジェクト単位、研究室単位で個別に技術員を抱えることが多い中、OISTは高度な操作やデータ解析を行う技術員・研究支援職員をリサーチサポート部門として確立し、研究ユニットを横断的・学際的・多角的に支援。
- 博士号をもつ技術員・研究支援職員は国内外の研修等に参加し、技術・ノウハウの蓄積や最新技術の情報入手に努め、日進月歩の研究を専門的視点よりサポートしている。